

むかし、あるところに、仲のよい働き者の兄弟がいました。いつもふたりで、一生懸命、家の仕事をしていました。

あるとき、兄さんが、ふとしたことで、大きな病気にかかってしまいました。お医者さんの手にもあまるほどひどくなって、弟は、神さまや仏さまにすがって、

「どうぞ助けてやってください」と祈りました。

とうとうある晩、兄さんは、明日をも待てないようになりました。弟は、看病につかれきって、兄さんの枕元で、うつらうつら居眠りをしてしまいました。すると、どこからか、声が聞こえました。

「助けてやりたいから、知恵を使え。明日の晩、天からはしごを下ろしてやる」

弟は、はっと目が覚めました。

「兄さんに良くなってほしいあまり、たよりのないゆめを見たなあ」と、弟は思いました。

つぎの日の夕方、ほんとうに、天からはしごが下がって来ました。

「ゆめじゃなかった。知恵を使えといわれたが、まずはこのはしごを登らなくては」

弟は、はしごを登って行きました。どんどん登って行くと、きれいな部屋にたどり着きました。むこうのとびらの前に、大きな赤鬼が、いびきをかいて寝ていました。

「知恵を使えということだが、ここを通りぬければいいのだな」

弟は、赤鬼が目覚まさないように、そうつととびらを開けて、つぎの部屋に入って行きました。

つぎの部屋にもとびらがあつて、また大きな鬼がいびきをかいていました。弟は、

「こう鬼ばかりおったんでは、たまらん」と思いながら、そうつととびらを開けてつぎの部屋に入って行きました。

つぎの部屋には、一面にろうそくが立っていて、赤あかと輝いていました。よく見ると、長いや短いや、どのろうそくにも、名札が付いています。

「これはどういふことかしら」と考えながら、見て行くと、友達の名前の書いてあるろうそくがあつて、赤々と灯っていました。ところが、短くて、とぼとぼと消えそうなるうそくがあります。それは、年とつたおじさんのろうそくでした。弟は、はっと気がつ

きました。

「これは、命のろうそくだ」

弟は、急いで兄さんのろうそくをさがしました。すると、まだ長いけれども、横に倒れて今にも消えそうなるろうそくがありました。名札に、兄さんの名前が書いてありました。弟は、そのろうそくを、しゃんと立ててやりました。すると、また炎が上がりました。

弟は、自分や親や友達のろうそくをしっかり立て直して、部屋を出ました。とびらの前では、やはり鬼が寝ていました。その鬼の側を通りぬけ、つぎの鬼の側も通りぬけると、弟は、家の前にいました。兄さんは、もう起きて、仕事を始めていました。

それからふたりは、元気でせつせと働いて、大金持ちになったということです。

村上郁 再話

資料 『奥備中昔話集』 稲田浩二・立石憲利編／三弥井書店